

# 弥勒菩薩と観音菩薩 — 図像の成立と発展 —

宮治 昭

(龍谷大学文学部教授)

## 目次

1. ガンダーラの菩薩像— 悉達菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩 —
2. 半跏思惟像の成立と展開
3. 弥勒菩薩像の発展
4. 観音菩薩像の発展

【キーワード】： 観音菩薩 弥勒菩薩 上生信仰 下生信仰  
半跏思惟像 大仏 変化観音

## はじめに

北西インド(現パキスタン)のガンダーラで紀元 1 世紀に仏像が誕生し、仏伝浮彫や仏陀の彫像が制作されるが、ほどなくクシャー朝時代(1 世紀中頃～3 世紀中頃)には菩薩の彫像も造られるようになる。その後、インドのみならず、中央アジア・東アジアで菩薩の図像や造像が大きく展開する。弥勒菩薩と観音菩薩の図像の展開を対比的に追跡することによって、インドと東アジアの菩薩信仰の相違を明らかにしたい。

第 I 章でガンダーラの菩薩像について、図像上、3 種の菩薩像(悉達菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩)に分かれることを述べる。第 II 章で半跏思惟像を取り上げ、ガンダーラで悉達太子の思惟像から出発した半跏思惟菩薩像が観音信仰とも弥勒信仰とも関係をもって展開することを明らかにする。第 III 章で弥勒菩薩像、第 IV 章で観音菩薩像を取り上げ、それぞれインドでの展開の様相と、中央アジア・東アジアでの展開の様相をたどる。この検討を通して、インドと東アジアでの両菩薩の信仰の相違と、その理由や背景について考える。

## 第 I 章 ガンダーラの菩薩像—悉達(釈迦)菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩—

### 1. ガンダーラの 3 種の菩薩像

ガンダーラでは仏陀像(おそらくその多くは釈迦仏)のほかに、単独の菩薩像も数多く制作された。ガンダーラでは仏伝浮彫がたくさん造られており、釈迦の出家以前の悉達太子の姿をもとにして単独の菩薩像が制作されたと考えられる。釈迦はクシャトリアの王子として生まれたことから、菩薩像は当時(クシャー朝時代)の王侯・貴族をモデルにしており、上半身裸形で、下半身に裙(ドーティー)を纏い、瓔珞・耳璫・臂釧・腕釧などの装身具をつけ、天衣を掛けて表される。このような特徴をもつガンダーラの数多くの菩薩像を図像的な観点から検討すると、頭髪や冠飾の特徴、および持物によって以下の 3 種の菩薩像が区別される。

- (1) 悉達(釈迦)菩薩……頭部にターバン冠飾と呼ばれる、前立ちの装飾をもつターバン状の冠飾をつけており、手には持物をとらないタイプの菩薩像で、この姿の菩薩はガンダーラの仏伝浮彫中の出家以前の釈迦(悉達太子)の姿と同じであることから、悉達菩薩像と考えられる。
- (2) 弥勒菩薩……頭髪を∞字形に髻を束ねたり(束髪式)、あるいは肉髻状に丸く結び(肉髻式)、左手に水瓶を持つタイプの菩薩像で、この姿の菩薩は過去七仏とセットになった弥勒菩薩やカニシカ銅貨に表された在銘マイルレーヤ像と同じ姿であることから、弥勒菩薩と考えられる。
- (3) 観音菩薩……悉達菩薩と同じく頭部にターバン冠飾をつけ、左手には蓮華、もしくは華鬘(花綱)を持つタイプの菩薩像で、このタイプの菩薩像は観音菩薩の可能性が高いと考えられる。と

いうのも、中国初期の在銘観音(観世音)菩薩像が蓮華を持って表されること、また後世パドマパーニ(padmapāṇi, 持蓮華)菩薩は観音の別称となることから、ガンダーラにおいてもおそらく慈悲の象徴として蓮華を持つ菩薩が観音として造形されたとみられるからである。なお、ガンダーラで華鬘を持つ菩薩がすべて観音かどうかは明らかではないが、ターバン冠飾をつける菩薩が持物をとる場合は、決まって蓮華もしくは華鬘を持っており、華鬘は蓮華の代用もしくは前段階の持物とみられ、持華鬘菩薩も観音として造形された可能性が高い。

ガンダーラでは上記の3種の菩薩像が確認される。実際、3体の仏陀立像と3体の菩薩立像を交互に配する三仏三菩薩を表したガンダーラの浮彫パネル(タキシラ考古博物館所蔵)があり、それら3体の菩薩は(1)ターバン冠飾・無持物の悉達菩薩、(2)束髪・持水瓶の弥勒菩薩、(3)ターバン冠飾・持蓮華の観音菩薩と推定される。このようにガンダーラの菩薩像は頭髪や冠飾のあり方、および持物によって、図像的に3種類に明確に差別化しており、悉達菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩に同定されるのである。

## 2. ガンダーラの弥勒菩薩と観音菩薩

ガンダーラには単独の菩薩像のほか、仏三尊像と呼ばれる、中央の仏陀像とその左右に脇侍菩薩像を従える三尊形式の高浮彫の石板パネルの作例が42例ほど確認される。これらの仏三尊像は作例によってそれぞれ細部のヴァリエーションはあるが、多くの場合、中央の仏陀は大きな蓮華座上に結跏趺坐して説法印を結び、両側には菩薩立像が配され、仏陀の両肩部にはしばしば梵天と帝釈天が姿を現し、仏陀の頭上には花樹や天人・化仏・仏菩薩が表される。これらの高浮彫の図像が全体として何を表現しているかについての考察も重要であるが、ここでは両脇侍菩薩に注目したい。

42例の仏三尊像の作例を調べると、部分的に破損や欠損を含むものもあるが、少なくとも現在確認できる限りでは、両脇侍菩薩は左右の位置は一定しないが、決まって束髪式(もしくは肉髻式)・持水瓶タイプの菩薩像とターバン冠飾タイプの菩薩像(無持物もしくは持蓮華・持華鬘)とをセットにして配置しており、前述の検討から前者は弥勒菩薩、後者は無持物の場合は悉達菩薩、持蓮華もしくは持華鬘の場合は観音菩薩に同定しうる。つまり、仏陀・弥勒菩薩・悉達菩薩の組合せか、もしくは仏陀・弥勒菩薩・観音菩薩の組合せであり、作例数から言えば後者が多い。これらの仏三尊像は様式的に見て2~3世紀に遡るものもあるが、特にガンダーラ美術の後期、3~4世紀頃に流行したことが窺われ、弥勒菩薩と観音菩薩を両脇侍とする仏三尊像がガンダーラで定着していったと考えられる。

では、どうして弥勒菩薩と観音菩薩を一对にした仏三尊像がガンダーラで好まれたのだろうか。これにはおそらく菩薩の対照的な二つの性格や働きが関わっているものと思われる。

束髪にして水瓶を持つ弥勒菩薩の姿は、実は頭髪を結って水瓶を執る梵天(ブラフマー)の図像を基にしており、精神界の主である梵天の後裔とされるバラモンの姿も同様で、装身具などを一切つけず、行者としてのイメージを表している。これは弥勒がバラモンの出自をもつことや、当初仏弟子として修行者の性格を強く持っていたためであろう。インドではバラモンは僧侶・祭祀階級であり、いわば精神界を司る。

一方、ターバン冠飾をつけて蓮華(華鬘)を持つ観音菩薩の姿は、冠を被る帝釈天(インドラ)の図像を基にしており、神々の王である帝釈天の後裔とされるクシャトリヤの姿もターバン冠飾や装身具をつけ、王者としてのイメージを表している。インドでは王者は国を繁栄させ、人民を安穏にさせる責務を負うという王権観があり、クシャトリヤは武士・王侯階級であり、いわば世俗界を司る。ただ、帝釈天は金剛杵を執って武神としての性格を持つのに対し、観音菩薩は持物を蓮華(華鬘)に代えて、武神の性格を消して慈悲の性格を現している。

このように弥勒菩薩と観音菩薩の図像は梵天と帝釈天、バラモンとクシャトリヤ、行者と王者という対立的かつ相互補完的なインドの世界観・社会観を基にして成り立っていることが分かるが、それは菩薩の二つの基本的な働きとも密接に関係している。つまり菩薩の二つの働きとは、自ら努力し修行して、悟りを得ようとする「上求菩提」の働きと、苦しむ衆生に対して、慈悲心を起こし悟りに導こうとする「下化衆生」の働きとである。これは「成道」とそれに続く「梵天勧請」によって仏陀が備えた徳であるが、仏陀亡き後、それを菩薩は現実的な働きとして具現化するものといえよう。ガンダーラでは弥勒菩薩は「上求菩提」の働きを持ち、さとりの智慧の性格を有するのに対し、観音菩薩は「下化衆生」の働きを持ち、救いや慈悲の性格と結びついている。ガンダーラの仏三尊像はおそらく大乘的な仏身観に基づく永遠存在としての法身的な釈迦仏を中心に、仏陀の徳を具現化する菩薩の二つの働きを持つ弥勒菩薩と観音菩薩を両脇侍として従えることによって、仏国土を表現したものと考えられる。

## 第II章 半跏思惟菩薩像の成立と展開

椅子(多くは籐の椅子)に腰掛け、片足を踏み下げ、他方の足をその膝上に載せて、片肘をついて手指を顔に近づけて思惟する、独特の姿の半跏思惟像はガンダーラ美術に起源し(さらに遡ればギリシャ美術に淵源する)、菩薩信仰と深く関わりながら東アジアで一時期流行する。その様相をたどってみよう。

### 1. ガンダーラ・インドの半跏思惟像

ガンダーラの「樹下観耕」や「御者・愛馬との別れ」などの場面に、しばしば悉達太子が思惟する姿で

表れる。これは悉達太子が生死の苦しみについて思惟し、心配し、不安に思う(skt. *√cint*)姿を表している。「樹下観耕」の場面の経典を見ると、悉達太子は鳥が虫をついばむのを見て、「慈悲心を起こして憐れんだ」(『過去現在因果経』)と記している。

ガンダーラでは仏伝場面のみならず、単独の半跏思惟像も造像されており(20例以上確認される)、その多くは右膝に肘をついて右手を頬に近づける思惟相をとって表され、左手は蓮華を執っている。持物を執らない悉達菩薩と見られる半跏思惟像も少数あるが、大半は蓮華を執る半跏思惟像で、観音菩薩として信仰されたに相違ない。というのも、もともと悉達太子が生死の苦しみについて思惟し、「慈悲心を起こして憐れむ」姿であった半跏思惟像は、「生きとし生ける者すべてに対し、慈悲の眼をもって観る」(『法華経』「普門品」)と讃えられる観音菩薩の姿にまさに相応しいからに他ならない。悉達太子の半跏思惟の姿をもとに、手に蓮華を持った半跏思惟の観音菩薩像へと展開させたのである。

ガンダーラ後期に石造の半跏思惟形の観音菩薩像が成立し、その後、スワートやカシミールを含む北西インドでは、石製や金銅製の半跏思惟形の観音菩薩像が相当数造られている(6-8世紀頃)。例えば、スワート出土の金銅製の半跏思惟像(7世紀、メロポリタン美術館所蔵)は、頭に化仏をつけ、肩に鹿皮を掛け、右手を思惟相、左手に蓮華を執る、明確な観音菩薩像である。ただ、坐勢は左足を踏み下げ、右足は左膝上に載せることなく、台座におく形式の、インドで好まれた遊戯坐をとっている。いずれにしても、北西インドでは半跏思惟の姿が観音菩薩の図像として定着したことを物語っている。

しかし、インド内部の半跏思惟像のその後の歴史をたどると、中インドのマトゥラーにクシャーン朝後期の半跏思惟菩薩像が少数あるが(おそらくガンダーラの影響のもとに制作された)、グプタ朝以降はほとんど発展しなかったようで、半跏思惟菩薩像の作例は見当らない。おそらくインドでは禅定(*dyāna*)と思惟(*cintā*)は明確に区別され、結跏趺坐して禅定印を結ぶ禅定像が好まれたからであろう。もともと、インドでは作例が少ないが、如意輪観音菩薩像には「思惟相」が取り入れられており、衆生の救済について思いめぐらすポーズとしての伝統が観音菩薩の中に生き続けたことが分かる。

## 2. 中国の半跏思惟像

中国では、北魏時代前後にガンダーラの仏伝美術に由来する半跏思惟像が好まれ、単独の半跏思惟像がしばしば悉達太子像として造形された。例えば北魏太和16年(492)銘の悉達太子半跏思惟像(大阪市立博物館所蔵)を見ると、愛馬カンタカが太子の足もとに跪いており、ガンダーラの「樹下観耕」と「御者・愛馬との別れ」の場面が融合した形で造形され、半跏思惟の姿が悉達太子像として

認識され、信仰されたことが分かる。

一方、北魏時代に弥勒菩薩は交脚倚坐の姿で表されることが多く、しばしばその両脇侍として左右対称形に半跏思惟像が配される。雲岡第 17 窟明窓東側の浮彫は、獅子座に坐す交脚菩薩と半跏思惟形の両脇侍をとる三尊形式で、銘文から主尊の交脚菩薩が弥勒菩薩であることが分かる。左右の対称形をとる半跏思惟像は弥勒菩薩自身ではないが、弥勒信仰と関係深い補佐的な菩薩像と考えられる。このような三尊形式の作例は雲岡石窟に数多く見られ、後述のように弥勒上生信仰と深く関わっている(III 章 2 節参照)。

北魏後期～北齊時代になると、単独の半跏思惟像が多く造られるようになり、特別の信仰を生んだと見られる。それらの半跏思惟像にはしばしば「思惟」像と銘文が刻まれるが、「弥勒」の名は見られない。例えば東魏興和 2 年(540)銘の半跏思惟菩薩像(中国故宫博物院所蔵)は、白玉(白大理石)製の頭光をつけた美しい菩薩像で、瞑想風の顔容と右手指を頬に当てて思惟するポーズが素晴らしく、台座に願文・年号とともに「玉思惟」像と刻まれている。武定 2 年(544)銘の書道博物館所蔵の半跏思惟像もこれと大変よく似た像である(銘は「白玉像」)。果たしてこのような単独の半跏思惟像はどのような菩薩で、どのような信仰に基づくものであろうか。

ここで「思惟」という言葉自身を検討する必要があるだろう。思惟の原語であるサンスクリット *ś cint* には、「思考する」という意味の他に、「心配する」という意味があり、観音菩薩の思惟のポーズは後者の意味と関係づけられるのに対し、漢訳された「思惟」にはサンスクリットの後者の意味は含まれず、前者の「思考する」という意味で、むしろ瞑想、観想に近いニュアンスをもつ。禅観經典には「思惟」の語がよく使われており、そこでも「観想」に近い意味をもっている。

中央アジアで成立ないし編纂されたと見られる『観弥勒菩薩上生兜率天経』(『観弥勒経』と略す)には、兜率天への再生を願う者は、「一に兜率天上の上妙の快樂を思惟すべき」こと、また、「もし兜率天に生ぜんと欲する者あらば、まさにこの観をなし、念を繫け、思惟して兜率天を念ずべき」ことが記されている。このように考えると、中国の半跏思惟像は兜率天の快樂を思惟し、人々を兜率天往生へと導く菩薩として造形され、信仰されたものとみられよう。

半跏思惟像は朝鮮半島・日本に伝わり、さらなる展開を見せる。朝鮮三国時代の百済・新羅、そして日本の飛鳥・白鳳時代にも半跏思惟像は弥勒信仰と深く結びつき、それぞれの地域で政治・社会とも関わりながら、独自の信仰対象として見事な半跏思惟像を生み出していった。三国時代の新羅においては、統一新羅の国家形成に大きな役割を果たした花郎集団の弥勒信仰の本尊として半跏思惟像が制作、信仰されたとする説が有力である。広隆寺の宝冠弥勒と通称される木造半跏思惟像は、韓国国立中央博物館所蔵の金銅半跏思惟像とよく似ており、広隆寺像は新羅から贈られ、聖徳太子

が推古 11 年(603)に秦河勝に与えた仏像と見られ、弥勒菩薩である可能性が高い。

日本では半跏思惟像は聖徳太子信仰とも結びついて、中宮寺の半跏思惟像をはじめ 7 世紀に多くの優れた半跏思惟像が制作される。法隆寺に伝来した四十八体仏と呼ばれる小金銅仏にも半跏思惟像が多く含まれ、その中には三国時代の朝鮮半島で造られたと見られるものもある。大阪・野中寺の金銅半跏思惟像には「丙寅年」(666 年)に「弥勒像」を造立したという銘があり、朝鮮・日本では半跏思惟像自身が弥勒菩薩として信仰されていたと考えられる。しかし、奈良時代に入ると急速に半跏思惟像は造像されなくなる。おそらくその背景には仏教信仰の大きな変化があるものと推測される。

以上のように、半跏思惟像はガンダーラで悉達菩薩の姿として出発しながら、その後、北西インドでは観音菩薩として展開し、インドや東アジアで如意輪観音に受け継がれるが、中国で半跏思惟像は弥勒上生信仰と深く結びつき、朝鮮半島・日本ではその影響下のもとに、弥勒菩薩像として信仰されたと考えられる。

### 第 III 章 弥勒菩薩像の発展

#### 1. インドの弥勒菩薩像

クシャーーン朝からパーラ朝の時代(およそ紀元 2~12 世紀)において、弥勒菩薩は単独像として造像された例もあるが、全体から見ると少数で、インドでは特に弥勒信仰が盛んだったとは思われない。作例から見ると、過去七仏とセットにして表された弥勒菩薩、および特に仏三尊の脇侍菩薩の一体として、観音菩薩と対になる形で表されることが多い。すでに述べたように、仏陀を中心に弥勒と観音を両脇侍菩薩とする仏三尊像はガンダーラで成立し、その後グプタ朝からパーラ朝に至るまでインドの仏三尊像の基本をなしている。グプタ朝以降、弥勒菩薩の代わりに金剛手菩薩を配する例なども出てくるが、多くは観音菩薩の対尊として弥勒菩薩が配される。実際ガンダーラ以来、その後も弥勒は観音と対立的、かつ補完的な特徴をもって展開する。その様相を簡潔にたどってみよう。

ガンダーラでは弥勒菩薩は束髪にして水瓶を執る行者的な姿をとるのに対し、観音菩薩はターバン冠飾(化仏をつけることもある)をつけ蓮華(華鬘)を持つ、慈悲の性格をもった王者的な姿で表されたが、グプタ朝~ポスト・グプタ朝時代(5~8 世紀中頃)になると、頭髪や冠飾のあり方、頭前の標識、持物に変化が起こる。すなわち束髪式に結う頭髪は高く結い上げる形の髪髻冠(jaṭāmukūṭa)となり、ターバン冠飾は三面冠飾となる。また、頭前の標識として化仏のほかに仏塔が現れ、持物には水瓶と蓮華のほかに、数珠や龍華が見られる。そして、弥勒と観音はこれらの特徴を様々に組合せて表されるが、そのあり様は時代や地域(サールナート、およびアジャンター、カンヘーリー、ナーシク、カールな

どの石窟)によって異なる。その詳細は省くが、注意すべきは頭前の標識として化仏が弥勒についたり、仏塔が観音についたりする例や、持物として水瓶や数珠を弥勒が執る場合と、観音菩薩が執る場合とがあることである。この時代には、弥勒と観音が行者的と王者的という対照的な性格は明確ではなくなり、頭飾・冠飾、標識、持物などの特徴が弥勒と観音において相互に混淆する現象が生じているのである。ただ、蓮華と龍華はそれぞれ観音と弥勒の固有の持物となっている。

パーラ朝時代(8世紀中頃～12世紀)になると、上述の特徴は固定化する。すなわち、頭髪・冠飾については、弥勒と観音はともに髪髻冠にして頭飾をつけるが、標識は弥勒は仏塔、観音は化仏をつけて明確化される。持物については弥勒が龍華を、観音が蓮華を執る。このことは『サーダナマラー』『金剛座成就法』に、触地印仏陀の両側には、仏塔をつけ龍華を執る弥勒菩薩と、化仏をつけ蓮華を執る観音像が配されると説かれることと一致する。このようにパーラ朝時代には、標識と持物が弥勒と観音では明確に区別され、差別化して表される。弥勒が仏塔をつけるのは、おそらく仏塔が釈迦の象徴であり、弥勒が釈迦の後継者であることを意味し、龍華を執るのは弥勒が龍華樹の下で悟りを開くことに由来するのであろう。

インドでは弥勒菩薩は釈迦のあとを嗣いで次に仏陀となり、龍華樹の下で悟りを得、説法するという伝承は受け継がれたものと見られる。しかし、造形から見る限り弥勒菩薩の単独像は少なく、弥勒の独自の信仰は発展せず、上述のように仏三尊像の観音菩薩の対尊として表されることが多かった。それ以外には、僅かにパーラ朝時代に八大菩薩のうちの一尊として密教美術の中に存続したことが確認される。

## 2. 中央アジア・中国の弥勒信仰と造像

弥勒信仰とその造形は、むしろ中央アジアから中国において発展を遂げる。特に弥勒の上生信仰・下生信仰が明確となっていく点に大きな特徴がある。

### (1) 上生信仰の弥勒・・・兜率天上の弥勒菩薩

ガンダーラおよび特にアフガニスタンのカーピシーから出土した浮彫彫刻に、神々や人々に取り巻かれる形式の独特の弥勒菩薩の作例が相当数ある。中央の弥勒菩薩が頭髪を束ねたり、丸く結び、左手に水瓶を持つ点は変わらないが、両脚をX字形に交わせる形で椅子に腰掛ける、交脚倚坐と呼ばれる姿が特徴的で、頭上には天蓋が付けられ、しばしば牀帳を配するのも独特である。台座の両側に獅子を表し、獅子座をとることも少なくない。周囲には神々や人々が散花するなどして、中央の弥勒菩薩を讃嘆する。人々の中には遊牧民の服装をした王侯・貴族らしい人物が表されることも多い。



このような図像は一般に「兜率天上の弥勒菩薩」と呼ばれ、弥勒菩薩が兜率天で神々に説法し、神々に讃嘆される様子を表したものと考えられる。もともと、遊牧民の姿をした王侯をはじめ、僧侶も表されることがあり、地上の人物像も見出される。おそらく主題的には「兜率天上の弥勒菩薩」を表しながら、寄進者や導師として遊牧民の王侯や僧侶の姿をそこに加え、兜率天への再生、弥勒菩薩との邂逅を願った構図といえよう。

このような「兜率天上の弥勒菩薩」の図像は、ガンダーラやカーピシーに起源し、中央アジアのバーミヤーンやキジル、また雲岡や敦煌など中国北魏時代に流行する。交脚弥勒菩薩の姿は、クシャーン朝の宮殿址ハルチャヤン(ウズベキスタン)に見られるように、おそらく遊牧民の王侯像がそのモデルとなったのだろう。クシャーン民族を中心に遊牧民の間でとりわけ弥勒信仰が盛んだったことは、弥勒菩薩像の供養者、讃嘆者として遊牧民の服装をした人物がその隣に表される作例が多いことや、カニシカ貨幣(銅貨)に在銘の弥勒像が見られることから窺える。砂漠の広がる中央アジアを支配した遊牧民の間では、もともと「天」に対する信仰が強く、弥勒上生信仰はそうした遊牧民の信仰と融合する形で発展したに違いない。バーミヤーン石窟にはドーム天井の中央に弥勒菩薩を描く例が多く、キジル石窟では中心柱窟の入口を入った上部の半円形区画にしばしば「兜率天上の弥勒菩薩」が描かれており、中央アジアの仏教美術の重要なテーマを成したことがうかがわれる。

雲岡石窟には石窟内の上方に、交脚弥勒菩薩を表した例は多い(5世紀後半)。特に宮殿を表す建築の中で、弥勒菩薩が交脚倚坐の坐勢で獅子座に坐し、その両側に左右対称形に半跏思惟像を配置する構図が大層好まれた。弥勒上生信仰に関するまとまった経典は、劉宋・沮渠京声訳『観弥勒経』のみで、この経典には光に満ち溢れ、華麗な楼閣に囲まれた兜率天の宮殿内で獅子座に坐す弥勒菩薩が多くの人・天女に讃嘆される様子が描写されている。造形上の構図はより簡素で定形化したものだが、天上の宮殿と獅子座は表され、ガンダーラ以来の交脚倚坐の姿が「兜率天上の弥勒菩薩」の図像となっている。

中国北魏時代に弥勒上生信仰はどのように受け入れられていたのだろうか。それを示す例として、龍門古陽洞の長楽王丘穆陵亮夫人尉遲氏造像龕を取り上げよう(太和 19 年(495))。この石窟内の北壁上部に、花綱で飾られた天蓋状のアーチ龕下で、交脚倚坐の坐勢をとって獅子座に坐す弥勒菩薩が表されている(頭部欠損)。この造像龕の銘文には次のようにある。

「長楽王なる丘穆陵亮夫人尉遲が亡くなった息子のために、弥勒像一区を造らせた。願わくば亡き息子が迷いの苦界を捨て、無礙の境に騰遊せんことを。また、もし託生するならば、天上諸仏の所に生まれんことを。」

このように貴族の母親が亡くなった息子が「無礙の境」にのぼり、「天上諸仏の所」に生まれるように

願って弥勒像を造ったのである。死者の霊魂が天上世界に再生するよにという信仰は、弥勒上生信仰に基づくものであるが、中国の道教的な神仙思想、昇仙思想とも習合し、それによって北魏時代を中心に弥勒信仰が隆盛したのである。

敦煌莫高窟にも北魏時代に塑造の交脚弥勒像が多く造られるが、その後隋代には壁画による弥勒上生変(兜率天上の弥勒菩薩)が表されるようになる。第 423、433、419 窟などには、窟内の折上げ天井に、楼阁宮殿内に交脚弥勒菩薩が天人たちに讃嘆される様子を描いた弥勒上生変が見られ、北魏時代の「兜率天上の弥勒菩薩」の図像伝統が継承されている。唐代には第 329、331、208、33、116、148、202、231、358 窟などに見られるように、弥勒上生経変と弥勒下生経変とをセットにして描くことが一般化する。しかし、上生経変は上方に小さく表されるのに対し、下方に表される下生経変は龍華三会の弥勒の説法を構図の中心にしなから、弥勒下生経に基づく説話場面をも取り込んで大画面構図とすることが多い。唐代には上生信仰から下生信仰へと、弥勒信仰がシフトしていったことが推測される。

## (2) 下生信仰の弥勒・・・弥勒大仏

弥勒下生信仰に関係する経典(弥勒下生経)は、鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』などの漢訳 4 部(「弥勒六部経」)のほか、梵本 *Maitreya-vyākaraṇa* も知られ、東晋代訳の(訳者不明)『弥勒来時経』の存在から考えて 4 世紀には下生経が成立していたと考えられる。弥勒下生経の内容は諸本によってヴァリエーションがあるが、その骨子は「遠い将来弥勒が下生する時、転輪聖王が出世して、五穀豊穡で人々の寿命と身長が伸び、バラモンの家に生まれた弥勒は出家して、龍華樹の下で悟りを開き、三回にわたって説法し、多くの人々を悟りに導く」というものである。

弥勒下生経の内容の大きな特徴は、弥勒が兜率天より下生する時、同時に転輪聖王が出世して世俗的に繁栄した社会のもとで、弥勒は大仏となって現れ(弥勒は丈六の釈迦の 10 倍である十六丈の身長)、多くの人々を悟りに導く、という点にある。弥勒の出現は、世俗的な王権と関わって聖俗両界にわたってユートピア世界が実現されるという信仰をもち、弥勒大仏はその象徴となる。

弥勒下生経がいつ頃、どこで、どういう歴史的・社会的背景のもとに成立したかは不明だが(おそらく北西インドの 3～4 世紀の歴史状況と関わるのであろう)、下生信仰が北西インドから中央アジア・中国へと流布し、弥勒大仏の造像と結びついて発展する。

インドには高さ 10m 以上の大仏と呼べる造像はほとんど見当たらない。おそらく最初の大仏は、北西インド(現パキスタン北部)のダレルに 4 世紀には造立された木造弥勒大仏で、現存しないが法顕や玄奘がその記録を残している(『法顕伝』では高さ八丈)。その後、バーミヤーン石窟(東に高さ 38m

の釈迦大仏、西に高さ55mのおそらく弥勒大仏)、キジル石窟(第47、77窟など、現在消失)などに大仏が造立され、中国では北魏時代の雲岡石窟の曇曜五窟(第16~20窟)が有名だが、中国唐代に特に弥勒大仏の造像が流行する。敦煌莫高窟の北大仏(第96窟、高さ38m)と南大仏(第130窟、高さ26m)、天梯山石窟大仏(第13窟、高さ26m)、炳靈寺石窟第物(第171窟、高さ27m)、麦積山石窟(第13窟、高さ15m)、須弥山石窟大仏(高さ約20m)、樂山凌靈寺大仏(高さ71m)など、多くは敦煌から河西回廊沿いに西安・洛陽に至古代交通路に添って大仏が造像されている。これらはいずれも倚坐形式の仏陀像で弥勒大仏と考えられる。

大仏の造像にはいくつかの動機が考えられるが、有力支配者の力(権力・財力)なくしては困難なこと、同時に仏教思想・信仰が大きな要因となったであろうことは想像に難くない。現存作例や文献から知られる中国の大仏には、盧舎那仏や阿彌陀仏もあるが、その大半は下生した倚坐形式の弥勒大仏である。前述のように弥勒下生信仰には、将来、弥勒が下生して巨大な姿の仏陀となり、同時に転輪聖王が出世して、聖俗両界にわたって理想的な仏国土がこの世に出現するという信仰が基礎にあり、弥勒大仏を造立することによってそれが実現すると考えられたからに違いない。

龍門奉先寺大仏は高宗の勅願によって造像され、皇后武氏(則天武后)の援助によって上元2(675)年に完成した奉先寺大仏(高さ17m)は華嚴經の教主である盧舎那仏であるが、則天武后はその後、弥勒信仰に傾倒し、薛懷義らの仏教僧と図って自ら転輪聖王に擬え、洛陽城内に乾漆の大仏(高さ百余尺、『旧唐書』による)を造らせており(垂拱4年(688))、弥勒大仏の可能性が高い。天授元年(690)には、『大雲經』とその注釈『大雲經疏』によって、「武后は弥勒の下生であり、この世の主となる聖母神后なり」として武周革命の思想的バックボーンとなったことはよく知られている。

日本では大仏と言えば、聖武天皇による東大寺の盧舎那大仏造立が名高いが、それはおそらく奉先寺大仏の先例を継承しながらも、銅製鍍金の技術によってそれを凌ぎ、東アジアで先端をいく仏教国家設立の宣言ともいべき事業であった(752年大仏開眼)。実は、東大寺の盧舎那大仏の影に隠れているが、京都府相楽郡・笠置寺の摩崖弥勒大仏は東大寺の大仏造立とも関わった可能性がある。元弘の役(1331年)で消滅してしまったが、それを模刻した大野寺の摩崖弥勒仏(承元3(1210)年、後鳥羽院の発願)、および笠置曼荼羅(13世紀、大和文華館所蔵)によってその様子が分かる。笠置寺は弥勒信仰に厚い貞慶による復興によって名高いが、東大寺大仏殿建立のため良弁がこの地から材木を切り出し運んだとする伝承もあり、笠置弥勒大仏は奈良時代後期にまで遡る可能性がある。いずれにしても、弥勒信仰に基づく大仏造像は日本にまで及んでいる。

以上のように、弥勒信仰とその造像はガンダーラで興起し、インドでは観音菩薩と対照的、補完的関

係をもちながら展開するが、独自に発展した形跡は見られない。これに対し、中央アジア・東アジアでは上生信仰・下生信仰の形が明確化しつつ、「兜率天上の弥勒菩薩」や「弥勒大仏」の造形となって大きな発展を見せたのである。

#### IV 章 観音菩薩像の発展

観音菩薩の信仰と造像は、弥勒菩薩とは異なり、インドでも東アジアでも発展を見る。しかしながら、その発展の様相はインドと東アジアでは大きく異なる。その様相を見てみよう。

##### 1. インドの観音菩薩像

インドではグプタ朝(5～6世紀)以降、サールナートや西インドの石窟などで観音菩薩像の造像が盛んとなる。菩薩像の中で観音像はインドでも最も人気があり、単独像も多い。この時期には、観音像は頭髪を高く結う髪髻冠(jaṭāmukūṭa)をとり、頭前に化仏をつけ、右手は与願印とするのが一般的で、左手で蓮華(padma)を執る図像が定着する。左手で蓮華を執るのは観音の顕著な特徴であるが、切り花ではなく、大地から生ずる蓮の茎を執るのが特徴となり、右手の与願印は救済者に手を差し伸べる手振りといえる。髪髻冠の前面に化仏をつけることが定着するが、その化仏は『観無量寿経』の説く「立化仏」ではなく、禅定印を結ぶ坐像の化仏で、それはおそらく阿弥陀仏で、密教で観音が阿弥陀を主とする蓮華部に属することと関係するであろう。

観音菩薩の大きな特徴は、『法華経』「普門品」に説かれる、苦しむ人を救ってくれるという性格で、特に現実的な苦難に出会った人々を救済する様子を表した「諸難救済の観音菩薩像」が西インドの石窟寺院(アジャンター、アウランガーバード、カンヘーリー、エローラなど)に見られる(アジャンターには壁画作例もあるが、高浮雕の彫刻が多い)。例えばアウランガーバード第7窟の作例では、中央に大きく観音立像が単独像のように表され、その両側に4つずつの区画を設け、それぞれに危難に遭遇した人々を観音が飛来して救う場面を表している。すなわち、向かって右には上から「獅子難」「蛇難」「象難」「羅刹難」、左には「火難」「刀難」「枷鎖難」「海(難破)難」である。これは『法華経』「普門品」に由来するものであるが、実際の内容は宋・法賢訳『一切仏撰相応大教王経聖観自在菩薩念誦儀軌』に説くところに近い。インドでは特に現実の危難から逃れるための観音の陀羅尼と結びついて発展したものと思われる。

ポスト・グプタ朝(6世紀中頃～8世紀中頃)以降、インドでは多くの密教系観音が造像される。それらを便宜的に多臂観音・変化観音・狭義の密教系観音の3種に分けて考えると、全体の様相が把握しやすい。多臂観音は四臂以上の手をもつ観音像であるが、インドでは四臂像・六臂像・十二臂像が見られる。一方、変化観音は観音が多様な姿に変化して衆生を救うという信仰から用いられる呼称であ

るが、不空羂索・十一面・千手・如意輪・馬頭・准胝といった特別の図像をとる観音を指す。日本で盛んに造像された変化観音像はインドに起源すると考えられるが、作例は大層少ない。これに対し、狭義の密教系観音は『サーダナマーラー』などに説かれる、インドで固有名詞をもった特定の観音で、パーラ朝時代の作例が多い。

以下に、これら3種の密教系観音に分けてそれぞれの様相を述べよう。

#### (1) 多臂観音・・・四臂・六臂・十二臂

インドの現存の密教系観音像を整理すると、まず臂数を二臂から四臂・六臂・十二臂に増やした多臂観音像が目立つ。その際、増やした手の特徴や印相に注目すると、四臂観音像は与願印・持蓮華の二臂観音像を基にして、ブラフマー（梵天）の持物である数珠と水瓶をそれぞれ執る手を加えて四臂とすることが多い。六臂観音像や十二臂観音像には、一定した決まりはないが、与願印・蓮華・数珠・水瓶の他に、施無畏印・梵篋・宝珠・羂索・三叉戟・吉祥果などを執る手が加わる。智慧の象徴である梵篋や、豊穡・願いの成就の象徴である宝珠、さらには災いや悪を封じる力をもつ羂索を執る手を加えて、観音の功德を増やしていったと考えられる。

#### (2) 変化観音

日本では不空羂索・十一面・千手・如意輪・馬頭・准胝の観音像が変化観音として信仰され、多くの造像がなされた。それは特に平安時代以降、六道救済の観音として六道それぞれに変化観音が割り当てられたり、あるいは観音霊場の札所に変化観音が祀られたりしたことによる。しかし、これらの変化観音像をインドに遡って検討すると、不空羂索観音を除いて、その作例は極めて少ない。また、准胝観音はインドではチュンダーと呼ばれる女尊で、中国・日本で観音に取り込まれた尊像である。

変化観音の中で不空羂索観音はインドでもかなり造像されたとみられるが、その実態は把握しにくい。不空羂索について説く経典（陀羅尼、儀軌）には、闍那崛多訳『不空羂索呪経』、李無諂訳『不空羂索陀羅尼経』、菩提流志訳『不空羂索神変真言経』など漢訳本を中心に数多くあり、しかもその姿は様々に説かれる。しかし、全体的に見ると、肩に鹿皮を着け、多臂で持物として蓮華・水瓶・数珠・施無畏印のほかに、羂索や三叉戟を執るといった特徴が窺える。『不空羂索呪経』や『大智度論』では、その姿は「自在天（シヴァ）の如し」と説かれるが、実際にはシヴァのみならず、ブラフマーやヴァルナなどの要素も取り入れている。すなわち、肩に鹿皮をつけるのはブラフマーや仙人・行者の特徴であり、また羂索は悪を縛り付ける縄を意味し、インドでは古くから病や災いを封じる羂索呪の信仰があり、裁きの神ヴァルナや冥界の神ヤマの持物となる。

このように不空羂索観音はシヴァ、ブラフマー、ヴァルナといったヒンドゥー教の神の持物、要素を取

り入れ、その力を不空罽索観音の功德にしたのである。前述の四臂・六臂・十二臂の多臂観音像の中で、肩に鹿皮を着け、手に罽索や三叉戟を執る像は不空罽索観音と見てよいだろう。

### (3) 狭義の密教系観音

ここでいう密教系観音とは、変化観音以外の、固有名詞を持った特定の観音を指し、インドの成就法『サーダナマーラー(観想法の花環)』にローカナータ(Lokanātha、世間主)、ローケーシュヴァラ(Lokeśvara、世自在)、アヴァローキテーシュヴァラ(Avalokiteśvara、観自在)の名で説かれる尊像と密接に関係する。二臂や四臂の尊像があり、ポスト・グプタ朝時代から特にパーラ朝時代にかなり造像が盛んで、作例も少なくない。代表的な尊像として金剛法、獅子吼観音、青頸観音を取り上げよう。

#### ① 金剛法(Vajradharma、Bhattacharyya 本 No.10)

結跏趺坐して左手で蓮華の茎を執り、胸前において右手でその花を開く仕草をとる姿の観音で、金剛界曼荼羅四印会に描かれる密教の聖観音(金剛法菩薩)である。

#### ② 獅子吼観音(Siṃhanāda、Bhattacharyya 本 No.17)

獅子に乗り、輪王座の坐勢で坐し、右手を右膝にかけ、左手で剣の載った蓮華の茎を執る。右背後に蛇の巻き付いた三叉戟を表す。「獅子吼」の名はおそらく釈迦の説法と関係づけられるが、獅子に乗る像容や蓮華に剣を載せる点など文殊菩薩との繋がりが見られる。一方、蛇の巻き付いた三叉戟は明らかにシヴァとの関係が窺える。

#### ③ 青頸観音(Nīlakaṇṭha、Bhattacharyya 本 No.39)

サールナート出土の作例が名高く、結跏趺坐して両手で鉢を持つ独特の姿で表され、頭上には大きな阿弥陀の化仏を表している。「ニーラカンタ(青頸)」はシヴァの別名で、乳海攪拌の際ヴァースキ龍王が吐き出したハーラーハラという猛毒をシヴァが飲んだため、喉が青くなったという神話に由来する。『サーダナマーラー』(No.39)には、「宝に満ちたカパーラ(頭蓋骨の杯)を定印の手の上に載せ、虎皮の腰布を着ける」とあり、作例と異なる点もあるが、シヴァの神話と深く関わって、その要素を取り入れていることは確かであろう。

この他にも六字観音(Ṣaḍakṣarī)、カサルパナ観音(Khasarpana)などがある。これらの密教系観音は仏教の他の菩薩の要素を取り入れることもあるが、多くはヒンドゥー教、とりわけシヴァ神の神話や特徴を取り込んで、観音としている。日本で広まった慈悲のほとけとしての観音のイメージとはかけ離れた発展を示す。インドでは観音は Avalokita(観)+Īśvara(自在)として、自在天つまりシヴァ神と深く結びついて発展したからであろう。と同時に、インドの菩薩像の中で観音が最も多く造像され、信仰されたのも、世間主、世自在、観自在と呼ばれ、最高主として特別の位置を占めたからであろう。

## 2. 東アジア／日本の観音菩薩像

観音信仰と造像はインドだけでなく、東アジアでも大きな発展をみせた。観音について説く經典は、大きく見て以下の3系統に分かれ、いずれも東アジアで流布したものである。

①『法華経』『普門品』……慈悲深い、衆生の救済者として説かれる。

②『無量寿経』『観無量寿経』……阿弥陀仏の脇侍菩薩、また補佐役として説かれる。

③『華嚴経』『入法界品』……観音の住居である補陀落山について説かれる。

これらの經典に基づく観音菩薩が図像化され、中国や日本で多くの絵画・彫刻の作品が生まれた。その中でも『法華経』『普門品』に説かれる、慈悲・救済のほとけとしての観音が信仰の核となって、日本では特に平安時代以降、六道救済と結びついた六観音信仰や観音霊場信仰の隆盛とともに、変化観音が多く造像された。もともと、十一面観音や千手観音、不空罽索観音など、かなりの変化観音が雑密經典(陀羅尼經典)の中に説かれていて、すでに奈良時代にそれら經典も請来され、写経されており、造像されていることは注目される。インドで6～7世紀頃に成立したと見られる、変化観音に関する陀羅尼經典が早い段階で中国で漢訳され、日本に請来され、その図像や彫像も伝わったと考えられる。

十一面観音と千手観音を例にとり、図像の特徴とその由来を考え、インドと中国・日本との相違について考察したい。

### (1) 十一面観音(Ekādaśa-mukha)

十一面観音の由来は「普門品」の名称である *samantamukha* が「あらゆる方向に顔を向けた者」を意味し、観音の慈悲心が本面に加えて十方に顔を向けて表されているとする説(岩本裕説)が有力である。

十一面観音の經典には、耶舎崛多訳『十一面観世音神呪経』、玄奘訳『十一面神呪経』などがあるが、そこに説かれる像容はほぼ同じで、左手に蓮華を差した水瓶、右手は伸ばして数珠をかけるとある。なお、不空訳『十一面観自在菩薩心密言念誦儀軌経』では四臂像が説かれ、その図像は現図曼荼羅蘇悉地院に見られる。十一面の面貌は前三面を菩薩面(慈悲相)、左辺の三面を瞋怒面(瞋怒相)、右辺の三面を狗牙上出面(白牙上出相)、後ろの一面を大笑面(暴悪大笑相)、頭上に仏面を作るとある。

インドの十一面観音の作例としては、西インドのカンヘーリー石窟第41窟に仏三尊の右脇侍菩薩として表された高浮彫(6世紀後半)が知られる。この十一面観音立像は右手に数珠をかけて施無畏印

をとり、左手で大地から生じる蓮華の茎を執る。十一面の配置は頭上に積み重ねる形で、3つの菩薩面を2段、3つの瞋怒面を1段、その上に1つの瞋怒面(あるいは暴悪大笑面?)を表している。カンヘーリー像以外には、北西インドのカシミール出土の作例が知られ、クリーヴランド美術館所蔵の真鍮製六臂十一面観音立像はその代表である。この十一面観音は本面を含んで3つの菩薩面、その上に3つの瞋怒面、3つの暴悪大笑面、1つの瞋怒面、頂上に1つの仏面を積み上げている。前述の経典の記載と必ずしも一致するわけではないが、少なくとも菩薩面と瞋怒面、暴悪大笑面を区別し、3面を基本単位に組み合わせている点など、対応する部分が見られる。

いずれにしても十一面観音は、頭上に菩薩面のみならず瞋怒面・暴悪大笑面などの面貌を表す点に大きな特徴があり、通説のようにあらゆる方向(十方)に観音の慈悲が行き渡ることを象徴する造形とは思われない。十一面という数は、本面と十方に顔を向けるという意味に由来する可能性は高いが、その顔貌は三面シヴァ像や四面シヴァ・リングに見られる、シヴァ神の寂靜相や柔和相、忿怒相と深く関わっているに違いない。

中国では唐代(7世紀中頃～8世紀)の石造や金銅造、木造の十一面観音像の作例が相当数知られる。なかには四臂像や六臂像もあり、持物も水瓶、数珠、蓮華のほか、扠子を持つ場合や合掌手(六臂の場合)もあり多様である。十一面は本面以外は頭上に小さく表されることが多く(配置も一定しない)、それらの顔貌ははっきりしない。しかし、日本に請来された十一面観音像(法隆寺九面観音像、多武峯伝来東京国立博物館像など)を見ると、菩薩面・瞋怒面・狗牙上出面など、面貌の差異を意識して表現したようである。

日本では十一面観音像は奈良時代以降、その造像が多いに隆盛する。滋賀・向源寺の十一面観音像のように本面の左右に脇面をつける場合もあるが、大半は中国の作例のように、頂上面を除いて、頭上に1段もしくは2段にわたって3面ずつ、菩薩面・瞋怒面・狗牙上出面を表し、後ろに暴悪大笑面を表すことが一般的である(但し、欠損して不明の場合も多い)。奈良・聖林寺、奈良・法華寺、福井・多田寺、福井・羽賀寺、大阪・道明寺、奈良・室生寺、山形・宝積院など、各地に多くの個性的な十一面観音像が伝えられ、インドの作例が極めて少ないのと対照的である。

## (2) 千手観音(Sahasrabhuja)

千手観音は「千眼千臂観世音」「千手千眼観世音」と漢訳経典で呼ばれ、「一掌中各有一眼」とあるように、千本の手とそこに表された千の眼をもつ観音菩薩である。千手観音に関するサンスクリット経典(陀羅尼経)は知られないが、「千の腕をもつもの」(Sahasrabhuja)はシヴァのエピセツトであり、「千の眼をもつ者(Sahasra-akṣa)」はインドラ(Indra)の別名である。千手千眼はヒンドゥー神の名であったものを、



観音の功德として仏教に取り入れたものであろう。漢訳經典には、智通訳『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪經』、伽梵達摩訳『千手千眼観世音菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼經』、菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身經』などがあるが、千手それぞれについて具体的に説くことはなく、四十二大手や十八大手として代表され、その印相・持物を記している。

印相・持物にはインドの多臂観音像に見られる如意珠・縹索・施無畏・与願(甘露手)・紅蓮華・青蓮華・軍持(水瓶)・数珠・宝経・吉祥果(浦桃)などのほか、仏教の他の尊格やヒンドゥー教の神々の持物が多く含まれる(宝剣・金剛杵・宝弓・宝箭・鉞斧・宝戟・宝螺・髑髏杖・宝鐸・鉄鉤・金輪など)。また、通常仏弟子や供養者と関係深い合掌手や白払(払子)なども含まれ、さらには中国で付け加わったとみられるものもある(日精摩尼・月精摩尼・五色雲・化宮殿・玉環・宝鏡・宝印など)。

インドでは千手観音の作例は知られず、僅かにネパールで制作された『八千頌般若経』の挿絵に描かれたものがある(1015年制作、ケンブリッジ大学図書館所蔵)。この千手観音は胸前で転法輪印を結び、残りの多くの腕はぎっしりと扇形をなすように表されるが、手には持物をとらない。インドの図像を伝承した可能性もあるが、今のところ千手観音に関するインドの原典(陀羅尼經典)や図像は不明で、その様相をたどることはできない。ただ、前述のように千眼・千手はヒンドゥー教の神の名に由来し、「千」は極めて多い、偉大なことの代名詞であることから考えて、ヒンドゥー教の神々の働きや力を受容する形で、観音の偉大な功德を讃えた陀羅尼が基になって千手観音が成立したのではないかと推測される。

中国では千手観音は、特に唐代以降、大悲観音とか大悲菩薩と呼ばれて流行し、敦煌や四川省に多くの作例がある。敦煌では莫高窟や榆林窟の壁画、蔵経洞将来の絹本画・紙本画の作例など70件以上が知られ、四川省では仏龕内に掘り出された作例が50例以上報告されており、いかに千手観音が信仰されたかが窺える。中国の作例では、千手観音の大手である四十二手の印相・持物がかなり明確化し、また婆薮仙・功德天をはじめ多くの明王や二十八部衆など多数の眷属を従え、さらには如意輪観音と不空縹索観音を取り込んだ大悲変相としても表されるなど、図像的にも大きな発展を遂げる。おそらくそれには歴史的・社会的な背景とも深く関係するのであろう。

日本でも葛井寺の脱活乾漆像や唐招提寺金堂の木心乾漆像など、奈良時代以来千手観音の造像が盛んで、唐代に隆盛した千手信仰を反映している。それには玄昉による經典の請来や鑑真の千手観音像の請来が直接の契機になったとみられ、わが国でも積極的に千手観音の信仰と造像が受け入れられていった。平安時代以降も天台宗、真言宗とともに千手観音信仰は盛んで、京都・広隆寺、滋賀・延暦寺、奈良・東大寺、京都・東寺(火災損傷)、京都・醍醐寺などをはじめとして、優れた多くの木造の千手観音像が伝えられる。画像は平安時代に遡るものは少ないが、鎌倉時代の作には功德

天と婆藪仙、二十八部衆を眷属とした千手観音画像があり、変化観音の中でも特別の位置を占めてその信仰が存続したことがわかる。後白河法皇の発願によって平清盛が長寛 2 年(1164)に寄進した壮大な蓮華王院(三十三間堂)には、本尊の千手観音坐像と千体の千手観音立像、二十八部衆像が安置されたが、その後火災によって焼失し、文永 3 年(1266)に再建された。千体の千手観音像のうち 124 体が創建当初像という。いずれにしても、蓮華王院は平安時代末から鎌倉時代にかけての千手観音信仰の造像の極みともいべき遺構といえる。

十一面観音と千手観音を取り上げて、インドと中国・日本の変化観音の造像の様相を述べた。インドでは変化観音はいずれも、もともと陀羅尼と深く関わって成立したもので、シヴァ、ブラフマー、ヴァルナなど様々な神の特性(働き・力)を観音の功德として取り入れている。インドでは十一面観音、千手観音、如意輪観音といった変化観音は、尊像として造形し、祀り、祈るというよりは、実際の修法の場において単にイメージとして喚起されることが多かったのであろう。このことが、変化観音がインドであまり造像されなかった理由であろう。

これに対し、変化観音に対する陀羅尼経典が中国で漢訳された段階以降に、尊像を中心とした儀式や礼拝が重視され、中国や日本で尊像の造形化が積極的に行われるようになったのであろう。

## むすび

ガンダーラで悉達(釈迦)菩薩像、弥勒菩薩像、観音菩薩像が誕生し、その後インドのみならず、中央アジア・東アジアで弥勒菩薩と観音菩薩の信仰と図像がそれぞれ発展するが、その発展の様相は異なる。ガンダーラでは弥勒菩薩像と観音菩薩像は、ブラフマー(梵天)とインドラ(帝釈天)の図像を基にしながら、「上求菩提」「下生衆生」という菩薩の二つの働き、性格と関わって成立し、その後、インドでは両菩薩像は対照的、かつ相互補完的な図像の特徴をとって展開を見せる。

半跏思惟像はガンダーラで悉達菩薩の姿として出発し、ガンダーラを含む北西インドで観音菩薩の図像へと展開するが、中央アジア・東アジアでは弥勒信仰と関わって発展する。インドでは弥勒信仰とその図像はあまり展開しないが、ガンダーラから中央アジア、中国では上生信仰・下生信仰の形をとって、「兜率天上の弥勒菩薩」や「弥勒大仏」の造形として発展する。

一方、観音信仰とその造像はインドでも東アジアでも隆盛するが、両者ではその発展の様相を異にする。インドにおいては、観音菩薩は観自在と呼ばれ、自在天つまりシヴァ神との関係を強め、シヴァを中心にヒンドゥー教の神の特徴を取り込む形で、ポスト・グプタ朝以降、多臂観音・密教系観音が発展する。密教系観音はパーラ朝時代に成就法(観想法)とも関わって造形されるが、インドの密教系

観音(金剛法、獅子吼観音、青頸観音など)は東アジアでは金剛法(聖観音)を除き、ほとんど受容されなかった。これに対し、陀羅尼と関わって成立した変化観音(不空羅索観音、十一面観音、千手観音、如意輪観音など)は、陀羅尼経典が漢訳されて以降、造像化が進み、現実的な苦難の救済者として中国・日本で流行する。

菩薩信仰は地域や民族、歴史や社会に密着して生きた人々の願望と深く関わっており、それだけにインドではヒンドゥー教の土壌、中央アジア・中国では「天」信仰や道教的土壌の中で、その図像や造形が変容し、発展したといえよう。

[付記]

本稿は2013年1月17日に行われた筆者の最終講義「弥勒菩薩と観音菩薩—図像の成立と発展—」をもとにしている。論証を含む考察については、以下の拙稿を参照されたい。

『涅槃と弥勒の図像学—インドから中央アジアへ—』(1992年、吉川弘文館)所収の拙稿

「古代インドのブラフマーとインドラの図像について」(pp.213-244)

「ガンダーラの三尊形式の両脇侍菩薩の図像」(pp.245-280)

「ガンダーラの弥勒菩薩の図像」(pp.281-320)

「インドにおける弥勒図像の変遷」(pp.355-386)

「弥勒と大仏」(pp.389-410)

『インド仏教美術史論』(2010年、中央公論美術出版)所収の拙稿

「半跏思惟像の成立と展開」(pp.102-109)

「観音菩薩像の成立と展開」(pp.460-500)

「インドの密教系観音と変化観音の源流」(pp.502-543)

なお本稿に関わる一般書として以下の拙著がある。

『仏教美術のイコノロジー—インドから日本まで—』吉川弘文館、1999年

『仏像学入門—ほとけたちのルーツを探る—』春秋社、2004年

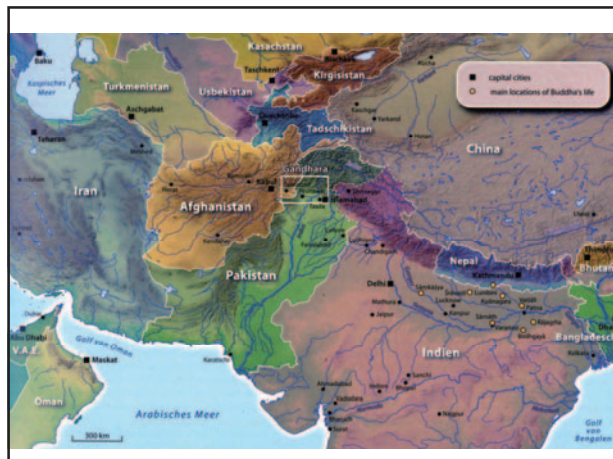
# 弥勒菩薩と観音菩薩

## — 図像の成立と発展 —

ガンダーラで仏陀像とともに菩薩像が誕生し、その後インドのみならず、中央アジア・東アジアで菩薩像が大きく展開する。弥勒菩薩と観音菩薩の図像の発展を対比的に追跡することによって、インドと東アジアの菩薩信仰の相違を明らかにする。

- I. ガンダーラの菩薩像—悉達菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩—
- II. 半跏思惟像の成立と展開
- III. 弥勒菩薩像の発展
- IV. 観音菩薩像の発展

2013.1.17  
宮治 昭



### I. ガンダーラの菩薩像—悉達(釈迦)菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩—

1. ガンダーラでは仏陀像のほかに菩薩像も多く造られた。菩薩像は悉達太子の姿をもとに、当時の王侯・貴族をモデルにしており、上半身裸形で、下半身に裙(ドーティー)を纏い、瓔珞・臂釧・腕釧などの装身具をつけ、天衣を掛ける。頭髪・冠飾と持物によって、図像上、3種の菩薩像が区別される。

- ① 悉達(釈迦)菩薩…ターバン冠飾・無持物  
仏伝浮彫中の釈迦の出家以前の姿
- ② 弥勒菩薩…束髪(もしくは肉髻状)・持水瓶  
過去七仏と一体の菩薩像、カニシカ銅貨の在銘マイトレーヤ像
- ③ 観音菩薩…ターバン冠飾・持蓮華(もしくは持華鬘)  
蓮をもつ菩薩(パドマパーニ)、中国初期の在銘観音菩薩

### ガンダーラの菩薩像—悉達(釈迦)菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩—



2. ガンダーラには仏三尊像の作例が40例以上あり、これら3種類の菩薩像が確認されるが、次第に弥勒菩薩と観音菩薩が一對となる。これは菩薩の2つの性格・働きとも関係する。

- ・弥勒菩薩…束髪・持水瓶  
←梵天/バラモンの祖神/行者のイメージ/精神界の主  
→上求菩提…自ら努力し、修行、瞑想し、悟りを得ようとする  
〔さとり…智慧〕
- ・観音菩薩…ターバン冠飾・持蓮華(華鬘)  
←帝釈天/クシャトリヤの祖神/王者的イメージ。  
但し、持物を武器(金剛杵)から蓮華に代える。  
→下生衆生…他に対し慈悲心を起こし、悟りに導こうとする  
〔すくい…慈悲〕

### ガンダーラの仏三尊像—仏陀・弥勒菩薩・観音菩薩—



## II. 半跏思惟菩薩像の成立と展開

半跏思惟像…椅子に坐り、片足を踏み下げ、片肘をついて思惟する姿

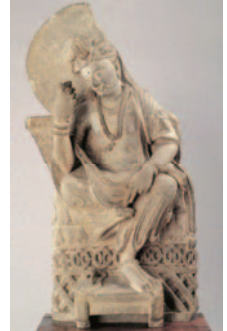
### 1. ガンダーラの半跏思惟像

- (1) 仏伝場面(「樹下親耕」「御者・愛馬との別れ」など)の中に、悉達太子が「思惟(Skt. v̄cint, cintā)」する姿で表わされる。これは悉達太子が生死の苦しみについて考え、不安に思う姿を表わしている(『ブッダチャリタ』)。
- (2) 単独の半跏思惟像も造像され(20例以上)、その多くは右手思惟相、左手で蓮華を持つ観音とみられる菩薩像。「樹下親耕」の場面で、悉達太子は鳥が虫をついばむのを見て、「慈悲心を起こして憐れんだ」(『過去現在因果経』)。  
→観音菩薩は「生きとし生ける者すべてに対し、慈悲の眼をもって観る」(『法華経』「普門品」)  
悉達太子の半跏思惟の姿をもとに、慈悲の象徴である蓮を手に持たせ、観音菩薩の図像に転用。

## ガンダーラの半跏思惟像—悉達太子から観音菩薩へ—



仏伝中の樹下思惟像 2-3世紀  
龍谷ミュージアム



半跏思惟菩薩像  
(観音菩薩)  
3-4世紀 松岡美術館

### 2. インドの半跏思惟像

- (1) スワート(ガンダーラの北側)の後期(6-8世紀頃)の石彫や金銅製の半跏思惟像では、頭に化仏をつけ、肩に鹿皮をつける観音菩薩像が定着。
- (2) 中インドのマトゥラーでもクシャーン朝時代の半跏思惟菩薩像が少数あるが、それ以後、発展しない。インドでは禅定dyānaと思惟cintāとは明確に区別され、結跏趺坐して禅定印を結ぶ姿が好まれ、思惟像は発展しない。ただ、如意輪観音菩薩像には「思惟」のポーズが取り入れられる。

## インドの思惟像—観音菩薩像—



観音菩薩半跏思惟像  
スワート出土 7世紀  
メトロポリタン美術館



如意輪観音菩薩像  
マイナーマティ博物館  
10世紀頃



如意輪観音菩薩像  
大阪・観心寺 9世紀

### 3. 中国の半跏思惟像

- (1) 北魏時代前後に、半跏思惟像は悉達太子の図像として用いられる。  
←ガンダーラの仏伝美術
  - (2) 一方、北魏時代に交脚弥勒菩薩の左右の脇侍として、左右対称形に半跏思惟像が配される。
- cf. 雲岡第17窟明窓東側  
…銘文から主尊の交脚菩薩が弥勒菩薩  
→左右の半跏思惟像は弥勒菩薩自身ではないが、弥勒信仰と関係深い補佐的な菩薩像。

## 中国の半跏思惟像



悉達太子半跏思惟像  
北魏太和16年(492)銘  
大阪市立美術館



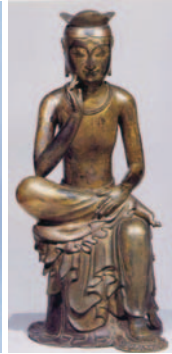
交脚弥勒菩薩像と両脇侍像  
北魏太和13年(489)銘  
雲岡第17窟明窓東側

- (3) 北魏後期～北齊時代に、単独の半跏思惟像が多く造られる。  
 ・銘文に「思惟像」と刻まれるが、弥勒の名は見られない。  
 ・中国では「思惟」は禅観經典によく使われ、禪定に近い意味をもつ。  
 ・中央アジア成立の『観弥勒菩薩上生兜率天経』『観弥勒経』には、兜率天への再生を願う者は、「一に兜率天上の上妙の快樂を思惟すべき」ことが説かれる。  
 →中国の半跏思惟像は、人々を兜率天往生へと導く菩薩として造形された。
- (4) 朝鮮三国時代の百済・新羅、日本の飛鳥・白鳳時代には半跏思惟像が弥勒菩薩として信仰。  
 →新羅の花郎集團の弥勒信仰との関係、聖徳太子信仰との関係。

中国・韓国・日本の半跏思惟像



半跏思惟菩薩像  
東魏・武定2年(544)  
東京・書道博物館



半跏思惟菩薩像  
7世紀初め頃  
ソウル・韓国中央博物館



半跏思惟菩薩像  
7世紀初め頃  
京都・広隆寺

III. 弥勒菩薩像の発展

1. インドの弥勒菩薩像

クシャーナ朝・グプタ朝・パーラ朝において、過去七仏と弥勒菩薩のセットとして、あるいは仏三尊像(仏陀・弥勒菩薩・観音菩薩が多い)の脇侍菩薩として、弥勒菩薩が表わされる。

・弥勒菩薩は観音菩薩と対立的、かつ補完的な特徴をもって展開

【ガンダーラ(2-4世紀)】

	【弥勒菩薩】	【観音菩薩】
頭髪・冠飾	束髪	ターバン冠飾(化仏)
持物	水瓶	蓮華/華鬘

【グプタ朝～ポスト・グプタ朝(5-7世紀)】

	【弥勒菩薩】	【観音菩薩】
頭髪・冠飾	髮髻冠/冠飾	髮髻冠
標識	仏塔/化仏	化仏/仏塔
持物	数珠/水瓶/龍華?	蓮華/数珠/水瓶

【パーラ朝(8-12世紀)】

	【弥勒菩薩】	【観音菩薩】
頭髪・冠飾	髮髻冠・頭飾	髮髻冠・頭飾
標識	仏塔	化仏
持物	龍華	蓮華

- ・それぞれの特徴は、時代や地域によって相互に入れ代わることもある。
- ・持物である弥勒菩薩の龍華(nāgakeśa)、観音菩薩の蓮(padma)は一定。
- ・インドでは単独の弥勒菩薩像は少なく、弥勒信仰は発展しない。
- ・ポスト・グプタ朝(7世紀)以降、龍華を執り、仏塔を頭前につける弥勒菩薩が定着…『サーダナマラー』『金剛座成就法』
- ・密教美術では八大菩薩の一体として造形される。

パーラ朝の仏三尊像



弥勒菩薩



降魔印釈迦仏



観音菩薩

仏三尊像 ハスラ・コル(ガヤー)出土 パーラ朝 10世紀 パトナー博物館

## 2. 中央アジア・中国の弥勒菩薩像

弥勒の upper 信仰・下生信仰が明確となる。

- (1) 上生信仰の図像・・・交脚で宝冠を戴く姿の「兜率天上の弥勒菩薩」  
 ・ガンダーラに起源し、パルミヤーン、キジル、中国北魏時代に流行。  
 ・中央アジアの「天」信仰と、遊牧民王者像のイメージが取り込まれ、中国の昇仙思想と習合  
 ・上生経は、劉宋・沮渠京声訳『観弥勒経』のみ。



ハルチャヤン宮殿址  
王侯像(復原図) 2世紀

兜率天上の弥勒菩薩  
ガンダーラ 3-4世紀

交脚弥勒菩薩像

5世紀末-6世紀初め

龍門古陽洞 長樂王丘穆陵亮夫人尉遲氏造像龕



「長樂王なる丘穆陵亮の夫人尉遲  
 が亡くなった息子のために、弥勒  
 像一区を造らせた。願わくば、亡き  
 息子が迷の苦界を捨て、無礙の境  
 に騰遊せんことを。また、もし託生  
 するならば、天上諸仏の所に生まれ  
 んことを。」



雲岡第10窟 兜率天上の弥勒菩薩 5世紀後半



兜率天上の弥勒菩薩  
キジル第38窟 7世紀



兜率天上の弥勒菩薩  
 (弥勒上生経变)  
 敦煌莫高窟 第423窟  
 折り上げ天井 隋

## (2) 下生信仰の図像・・・弥勒大仏

- ・「弥勒六部経」と称される漢訳本6部のほか、梵本 Maitreya-vyākaraṇa もある。  
 鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』、同『弥勒大成仏経』など。
- ・弥勒が下生する時、轉輪聖王が同時に出生し、五穀豊穡で人々の寿命と身長が  
 伸び、弥勒は龍華三会の説法をなして、多くの人々を悟りに導く。  
 →聖俗両界にわたってのユートピア世界が実現。弥勒は大仏  
 (釈迦は丈六、弥勒は十六丈)として出現。  
 →王権との結びつき
- ・ダレル(パキスタン北部)、パルミヤーン、中国では唐代に敦煌莫高窟、天梯山石  
 窟、炳靈寺石窟、須弥山石窟、楽山凌雲寺など、倚坐形式の弥勒大仏が多く造  
 像。
- ・中国では阿弥陀大仏、盧舍那大仏も造られたが、大仏のうち8割ほどが弥勒大  
 仏。日本では東大寺の金銅盧舍那大仏と並んで、笠置寺の線刻摩崖の弥勒大  
 仏。



パルミヤーン全景



パルミヤーン西大仏と仏龕天井壁画



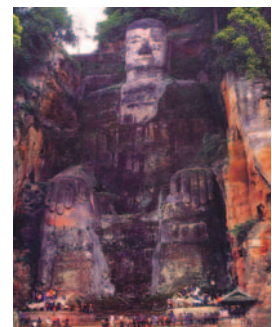
西大仏 h.55m



東大仏 h.38m



須弥山石窟 弥勒大仏 h.21.5m  
 晚唐



楽山凌雲寺 弥勒大仏 h.71m  
 唐(713-803年)



大野寺弥勒摩崖仏  
承元3年(1210) 後鳥羽院の発願



笠置曼荼羅図 13世紀 奈良・大和文華館

笠置弥勒摩崖仏  
8世紀後半?  
元弘の役(1331年)  
で消滅 h.16m



#### IV. 観音菩薩像の発展

- ・弥勒菩薩の信仰と造像は、インドではあまり発展せず、ガンダーラから中央アジア、中国で大きく発展。
- ・観音菩薩の信仰と造像は、インドでも、東アジアでも発展。しかし、その発展の様相はインドと東アジアでは異なる。

##### 1. インドの観音菩薩像

- ・ Gupta 朝後期(6世紀)以降、観音菩薩像は髮髻冠(jatāmukuta)をとり、化仏(禪定印坐仏=阿弥陀)をつけ、右手を与願印、左手で大地から生ずる蓮華の茎を執る図像が定着。
- ・ 諸難救済の観音菩薩像…西インドの石窟寺院(アジャンター、カンヘーリー、アウランガーバード、エローラ)に多い。『法華経』『普門品』と関係。
- ・ ポスト・グプタ朝(6世紀中頃~8世紀中頃)以降、インドで多くの密教系観音が造像される。
- …多臂観音・変化観音・狭義の密教系観音。



観音菩薩像  
サルナート 6世紀



諸難救済の観音菩薩像  
アウランガーバード第7窟 6世紀  
右)獅子難・蛇難・象難・羅刹難  
左)火難・刀難・枷鎖難・海難(難船)

『法華経』『普門品』と関係するが、宋・法賢訳『一切仏撰相応大教王経聖観自在菩薩念誦儀軌』に近い

- ・ ポスト・グプタ朝(6世紀中頃~8世紀中頃)以降、インドで多くの密教系観音が造像される。
- …多臂観音・変化観音・狭義の密教系観音。

##### (1) 多臂観音…四臂・六臂・十二臂

- ・ 与願印・持蓮華の二臂観音像をもとにして、プラフマー(梵天)の持物である数珠と水瓶を加えて四臂観音像とする。
- ・ 六臂観音像や十二臂観音像では、その他に施無畏・梵篋・宝珠・羂索などを執る手を加える。智慧の象徴である梵篋や、豊饒・願いの成就の象徴である宝珠などを執る手を加えて、観音の功德を増やしていった(羂索については後述)。



四臂観音



六臂観音



十二臂観音

##### (2) 変化観音

- ・ 日本では不空羂索・十一面・千手・如意輪・馬頭・准胝が変化観音として多くの造像がなされたが、インドでは不空羂索観音を除いて、作例は極めて少ない。また、准胝観音はインドでは女尊であり、観音に含まれない。

##### ★不空羂索観音(Amoghapāśa)

- ・ 不空羂索観音は經典(闍那崛多訳『不空羂索呪経』、玄奘訳『不空羂索神呪心経』、菩提流志訳『不空羂索呪心経』など)によってその姿は様々に説かれるが、肩に鹿皮を着け、多臂(四臂・六臂・十二臂)で蓮華・水瓶・与願(施無畏)・数珠のほかに羂索を執ることが多い。

- ・ 經典ではその形姿は「大自在天(シヴァ)の如し」(『大智度論』)とされるが、実際はシヴァのみならず、プラフマーやヴァルナなどの要素も取り入れている。

- ・ 鹿皮はプラフマーや仙人・行者の特徴。また、羂索は悪を縛り付ける繩を意味し、古くから病や災いを封じる羂索呪の信仰があり、裁きの神ヴァルナや冥界の神ヤマの持物である。

- ・ こうしたヒンドゥー教の神の持物、要素を取り入れ、その力を不空羂索観音の功德とした。



不空羂索観音(四臂観音)  
ラトナギリ 8世紀



不空羂索観音(六臂観音)  
10世紀 ビハール  
ニューデリー国立博物館



不空羂索観音立像  
脱活乾漆造 8世紀  
東大寺法華堂



(3) 狭義の密教系観音

・狭義の密教系観音は、固有名詞をもった特定の観音像で、二臂や四臂の尊像があり、『サーダナマラー(観想法の花環)』にローカーナタ(Lokanātha、世間主)ローケーシュヴァラ(Lokeśvara、世自在)、アヴァローキテーシュヴァラ(Avalokiteśvara、観自在)の名で説かれる尊像。インドではかなり造像が盛ん。

①金剛法(Vajradharma)

左手で蓮華の茎を握り、右手でその花卉をつまむ仕草をとる→金剛界曼荼羅四印念に出る密教系観音。

②獅子吼観音(Siṃhanāda)

獅子に乗り、輪王座の坐勢で坐し、右手を右膝にかけ、左手で剣の乗った蓮華の茎を執る。右背後に蛇の巻き付いた三叉戟を表わす。

③青頸観音(Nīlakantha)

両手で鉢を持ち、頭に禪定印阿彌陀仏、両肩に鉢を持つ女尊。→ニールカントはシヴァの別名で、世界を滅ぼす猛毒をシヴァが呑み込んだため、喉が青くなったという神話に由来。

その他、④六字観音(Ṣaḍaśarī)、⑤カサパルナ観音(Khasarpana)などがある。

・これらの密教系観音の多くは、ヒンドウ教の尊格(特にシヴァ)の神話や特徴を取り入れて、観自在としている。⇒日本で広まった慈悲のほとけとしての観音のイメージとはかけ離れる。これは観音をAvalokita + īśvara(自在天)としてシヴァ信仰と深い関係を持ったため。

インドの狭義の密教系観音



金剛法菩薩像 8世紀  
ラトナギリ(オリッサ)



青頸観音像 8世紀  
サルナート考古博物館



獅子吼観音像 11世紀  
マホーバー  
ラクナウ州立博物館

2. 東アジア/日本の観音菩薩像

・東アジアでは、観音信仰と造像が大きく展開  
・経典の上では3系統。これらの経典はいずれも東アジアで流布。

- ①『法華経』『普門品』…慈悲深い、衆生の救済者。
- ②『無量寿経』『観無量寿経』…阿彌陀仏の脇侍菩薩、また補佐役。
- ③『華嚴経』『入法界品』…観音の住居である補陀落山の聖地。

・それぞれの経典に基づく観音菩薩像が図像化され、絵画・彫刻で表現される。

・その中でも『法華経』『普門品』に説かれる、慈悲・救済のほとけとしての観音が信仰され、六道救済と結びついた六観音信仰や観音霊場信仰の隆盛とともに、平安時代以降、変化観音が多く造像された。

天台宗…聖・千手・馬頭・十一面・如意輪・不空羂索  
真言宗…聖・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪

・十一面観音と千手観音を例にとり、その図像の特徴を考える。

(1)十一面観音(Ekādaśa-mukha)

- ・「十一の顔をもつ者」→『法華経』『普門品』samantamukha →「あらゆる方向に顔を向けた者」
- 観音の慈悲心が本面に加え十方に顔を向けて表わされている(岩本裕説)。
- ・経典(耶舎崛多訳『十一面観世音神呪経』、阿地瞿多訳『十一面観世音神呪経』、玄奘訳『十一面神呪心経』など)では菩薩面(3) + 瞋怒面(3) + 狗牙上出面(3) + 暴悪大笑面(1) + 頂上仏面(1)。
- ・インド内の作例は1例のみ。カンヘーリー石窟第41窟(6-7世紀)の仏三尊像の右脇侍。
- 右手は施無畏印で数珠をかけ、左手で蓮華を執る。頭上に、菩薩面(3+3) + 瞋怒面(3+1)。
- ・その他に、カシミールの真鍮製六臂十一面観音立像(クリーヴランド美術館)。
- 本面を含み菩薩面(3) + 瞋怒面(3) + 暴悪大笑面(3) + 瞋怒面(1) + 仏面(1)。
- インドの作例から見ると、十一面は観音の慈悲のみを表わすのではなく、三面シヴァ像や四面シヴァ・リンガに見られる寂靜相や柔和相、忿怒相と深く関わっている。

・中国の唐代以降、日本では奈良時代以降、十一面観音の造像は盛ん。

十一面観音(Ekādaśa-mukha)



・「十一の顔を持つ者」  
→『法華経』『普門品』(Samantamukha)  
→「あらゆる方向に顔を向けた者」  
→観音の慈悲心が本面と、十方に顔を向けて表わされている(岩本裕説)。

・経典では  
菩薩面(3) + 瞋怒面(3) + 狗牙上出面(3) + 暴悪大笑面(1) + 頂上仏面(1)

・インド内の作例は1例のみ。カンヘーリー石窟第41窟(6-7世紀)の仏三尊像の右脇侍。右手施無畏・数珠、左手で蓮華をとる。頭上に菩薩面(3+3) + 瞋怒面(3+1)。

・カシミール 真鍮製 クリーヴランド美術館 六臂十一面観音立像

本面を含み菩薩面(3) + 瞋怒面(3) + 暴悪大笑面(3) + 瞋怒面(1) + 仏面(1)

→インドの作例から見ると、十一面は観音の慈悲のみを表すのではなく、三面シヴァ像や四面シヴァ・リンガに見られる寂靜相や柔和相、忿怒相と深く関わっているのではないかと。



十一面観音立像  
9-10世紀  
クリーヴランド美術館

四面シヴァ・リンガ  
ナチユナー



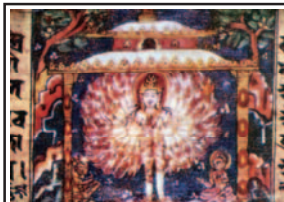
十一面観音像  
9世紀 奈良・法華寺



十一面観音像  
9世紀 滋賀・向源寺(渡岸寺)

## (2) 千手観音(sahasrabhujā)

- ・千手観音は「千眼千臂観世音」「千手千眼観世音」と漢訳經典で呼ばれ、「一掌中各有一眼」とあるように、千手千眼の観音。
- ・「千の腕をもつ者」(sahasrabhujā)はシヴァのエピテット。「千の眼をもつ者」(sahasra-akṣa)はインドラの別名。
- ・千手千眼はヒンドゥー教の神の名であったものを、仏教で観音の救済の働きとして取り入れた。
- ・「千」(sahasra)は「極めて多い」ことの代名詞として用いられ、經典(智通訳『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪經』、伽梵達摩訳『千手千眼観世音菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼經』、菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩施陀羅尼身經』など)にも、千手について具体的に規定されることはなく、十八手や四十二手などを正大手として代表させ、その印相・持物を記す。
- ・印相や持物は、インドの多臂観音に見られる如意珠・繡索・胡瓶・紅蓮華・軍持・数珠・宝鏡などのほか、仏教の他の尊格やヒンドゥー教の神々の持物が多く含まれる(宝剣・金剛杵・宝弓・宝箭・宝戟・宝螺・觀體杖・宝鐸・金輪など)。さらには、中国で付け加わったとみられるものもある(日精摩尼・月精摩尼・五色雲・宮殿・宝鏡・宝印など)。
- ・インドでは千手観音像の作例は知られず、僅かにネパールに伝わった『八千頌般若經』の挿絵に描かれたものがある(1015年に制作)。インドの圖像の可能性はあるが、手に持物を持たない。
- ・中国では、唐・五代・宋の時代に大悲(菩薩)像と呼ばれて流行し、敦煌や四川省に多くの作例がある。
- ・日本でも大阪・葛井寺、奈良・唐招提寺の奈良時代の作例をはじめ、平安時代以降多くの作例がある。



千手観音像  
1015年『八千頌般若經』挿絵 ネパール  
ケンブリッジ大学図書館



千手観音龕 盛唐(8世紀)  
丹稜鄭山第64号 四川省

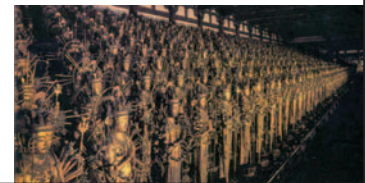


千手観音像  
奈良 唐招提寺  
8世紀後半



千手観音像  
京都 法性寺  
10世紀

千体千手観音像  
長寛2年(1164)  
建長3年(1251)-文永3年(1266)  
京都・蓮華王院(妙法院)



・インドでは不空羂索観音を除いて、変化観音の作例は大層少ない。どうしてか？

### ★ダラニと尊像化

- ・インドでは変化観音は、いずれももともとダラニ(陀羅尼)と深く関わって成立したもので、シヴァ、ブラフマー、インドラ、ヴァルナなど様々な神の特性(力・働き)を観音の功德として取り入れている。
- ・インドでは十一面観音、千手観音、如意輪観音といった変化観音は、尊像として造形し、祀り、祈るというよりは、実際の修法の場において単にイメージとして喚起されることが多かったであろう。このことが、変化観音像があまり造形されなかった理由であろう。
- ・これに対し、変化観音に関する陀羅尼經典が中国で漢訳された段階以降に、尊像を中心とした儀礼や礼拝が重視され、中国や日本で尊像の造形化が積極的に進められるようになったのであろう。

### むすび

- ・ガンダーラで悉達(釈迦)菩薩像、弥勒菩薩像、観音菩薩像が誕生し、その後インドのみならず、中央アジア・東アジアで弥勒菩薩と観音菩薩の信仰と圖像がそれぞれ発展するが、その発展の様相は異なる。
- ・インドでは弥勒菩薩像と観音菩薩像は、梵天と帝釈天の圖像をもとにしながら、「上求菩提」「下生衆生」という菩薩の二つの働き・性格と関わって成立する。その後、インドでは両菩薩は、対照的、かつ相互補完的な圖像の展開をみせる。
- ・半跏思惟像は悉達(釈迦)菩薩の姿として出発し、ガンダーラで観音菩薩の圖像へと展開するが、中央アジア・東アジアでは弥勒信仰と関わって発展する。
- ・インドでは弥勒信仰とその圖像はあまり発展しないが、ガンダーラから中央アジア、中国で上生信仰・下生信仰の形をとって「兜率天上の弥勒菩薩」や弥勒大仏として発展する。
- ・一方、観音信仰はシヴァ神を中心にヒンドゥー教の神の特徴を取り込む形で、インドでは密教系観音が発展する。しかし、インドの密教系観音は東アジアであまり受容されなかったのに対し、陀羅尼と関わって成立した変化観音が中国・日本で流行する。

### 参考文献

- 宮治 昭 『涅槃と弥勒の圖像学—インドから中央アジアへ—』吉川弘文館、1992年。
- 同 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版、2010年。
- 同 『仏教美術のイコノロジー—インドから日本まで—』吉川弘文館、1999年。
- 同 『仏像学入門—ほとけたちのルーツを探る—』春秋社、2004年。